

「下山の途中」

茨城大学を退職する2010年3月に最終講義をさせて戴きました。その時に、人生には3つ山があり、65歳から85歳が最後の3つ目の山、とお話しました。後期高齢者になった今、まさに、3つ目の山を下ろうとしています。そのこともあってか、法人を立ち上げたときに、何人かの方に、「いまさら何をやるんですか？」と問われました。当然の疑問と思います。

大学を退職する直前の工学部での送別会の折に、「やりたいことはすべてやりつくしました。思い残すことはありません」と言い放っているながら、いまだに大学のオフィス(場所は、日立から水戸へ移りました)にしがみついている姿はきっと奇異に見えることでしょう。ですから、新たに一般社団法人を設立した、と聞いたら、“気でも違ったのではないか?”と不審に思われた(ている?)のは当然かもしれません。理由はいくつかあるのですが、もっともらしい言い訳をしますと、次のようです。

五木寛之氏は、「下山の思想」(幻冬舎新書)のなかで、山に上るときよりは、下るときの方が周りによく見える、という意味のことを書かれています。

新しい法人のほとんどの役員や会員の方々はまだ上り坂です。ですから、上りで見えるものと下りで見えるものがどう違うのか、をこの組織の中で確認するのは大変楽しみなことです。

適切な例にならないかもしれませんが、例えば、地球環境分野では、“レジリエンス”という言葉が大事なキーワードの一つです。しかし、分野によってこのレジリエンスの定義が異なる、という課題があります。工学の分野の防災・減災の技術が生態系の維持の方法と等価ではないことがある、などはその典型です。Under CORONA, with CORONA の時代になって、事態は一層複雑になり、レジリエンス強化の大きな妨げになっています。思いがけない事態ですが、人類は有史以来あらゆる困難を克服してきました。英知を結集してきっと困難な事態を克服することができるでしょう。当法人も「気候変動対応技術&ビジネス研究会」の中で、このことに果敢にチャレンジして、今までにない新しいビジネスを作って参ります。

法人設立を考えているときに、リンダ・グラットン&アンドリュー・スコット著(池村千秋訳)「ライフシフト～100年時代の人生戦略～」(東洋経済新報社)を読みました。大変示唆に富む内容で勇気づけられました。ただその時は、COVID-19 などという予期せぬ出来事は、当然のことながら、想定されていませんでした。社会的な安全と安心を確保することが個々人のそれに繋がることを信じて、法人の運営を進めて社会的な信用と信頼を勝ち得ていきたいと思っています。

“誰かいる カサコソと鳴る 枯れ落ち葉
ふと知らされる 月改まる”
(令和2年10月19日)